

人間らしく働き続けられる 職場の確立を！

■コロナ禍になっても超勤は減らない

以前から超勤の取り組みは、会社として「サービス労働はしない」「さらなる効率化でいかに短い時間でパフォーマンスを生かすのか」としてきたが、「業務量増加」「要員不足」など、仕事を期限内に終わらせることができず、国労としても常に問題にしてきた。コロナ禍においても誰もが超勤をやらざるを得ない実態が続いている。

■何時でも2時間の超勤？



超勤をしなければならぬ社員の多くは若手となっている。保線職場では超勤を把握する為、夕方の終了点呼で「〇〇さんが2時間の超勤」と報告をしているが、2時間以内で終わらせる仕事はまれであり、結局は終わらせるのにそれ以上が当たり前になっている。「業務に対する経験不足」「要員減」であることが鮮明に現れている証拠ではないのか。

■「超勤問題の検証」から

2年前のベテラン社員の大量退職が過ぎてからより一層、超勤している実態がAパターン勤務者（8:30～19:00・23:30～翌5:00）や宿直者から把握することができる。過去と比べると終了時間に帰宅する社員はごく僅かとなり、管理者から「早く帰れ」と

注意される若手が多くなった。

当分会では「36協定」「超勤問題」について以前から確認し、若手を中心に説明してきた。だが、「そういう事実も知らないし知る気もない」という若手も見受けられる。さらに「36協定を締結しないと超勤ができなくなるし困る」しか考えていない様子もある。ベテラン社員としての国労組合員がキチントした説明をしながら組合運動を継承していく必要がある。

保線区時代あまりなかった超勤が「メンテナンス体制」移行後、当然の時代に。人も労働条件も「以前のJRに戻せ」の基本スタンスは変わらない。

全労東伸社グループ分会の 抗議集会デモに参加してきました

東部全労協主催により6月18日(金)18:30から全労東伸社グループ分会抗議集会が高森公園で開催



新小岩保線分会から2名が参加した。その後は社前経由でデモを行い、元気な声が地域に響き力強い抗議となった。東伸社はグループ会社である東伸社企画・東伸ITに業務移管し、組合員に対しては東伸社での仕事を減少させながら雇用不安を煽らせている。労働組合を押しつける会社側の組合潰しの狙いがあり、最高責任者であるオーナーは健康を理由として団体交渉に応じず、不誠実な対応を続けている当日はコロナ禍などの影響で集合場所やデモコースの変更があったにもかかわらず、最高責任者であるオーナーを団体交渉に参加させ安定した雇用を勝ち取るため各単産から150人以上が結集した。